

『禅のこころ-曹洞宗-』

しんとう か たしき しんまいおしょう
新到掛塔式 ～新米和尚～

平成29年5月第1週放送

毎年、春と秋になると、ご本山をはじめとする禅の修行道場には新しい入門志願者がやってきます。つい最近まで学生であった人もいれば、社会人であった人もいます。また、若い人たちに交じって年配の方もいます。誰もがこれから何が起るのかと、不安に駆られながら入門の日を迎えます。

彼らはまず道場の入口に立ち並び、入門の意志を伝えます。しかしながらすぐに道場の建物の中に入れてはもらえません。修行の邪魔になるからと門前払いをされることもあります。そこで帰る者はほとんどおらず、何時間も待たされた拳句にようやく建物の一室に通されます。入門を求める者はそこで何日も坐禅を組み続けて入門の許可を待つのです。坐禅と食事と掃除の日々が続きますが、少しずつ道場の雰囲気垣間見ることができてきます。

やがて、入門の意志が認められると、修行僧が坐禅や食事・寝起きを行う、僧堂と呼ばれる建物に入ることが許されます。僧堂に入ったからといって日々の生活はそれまでとほとんど変わりませんが、この頃からその道場のさまざまな規則などを、先輩の修行僧から厳しく指導されることとなります。食事の仕方や日に三度のお勤めのやり方、鳴らしものと言われる鐘や太鼓などを使った合図の音のルール、東司と呼ばれるトイレの使い方など、それまで聞いたことのないような道場の専門用語の洪水にみまわれながら、数多くの作法や規則を叩き込むことを求められます。この間多くの修行僧は、道場やって来た志と後悔との葛藤の日々を送るのです。

このようにして、修行道場特有の生活空間で日常生活に追われ、時に寝る間も惜しんでさまざまな作法や規則を身に着ける数か月の見習い期間を経て迎えるのが「新到掛塔式」です。この日を期して、ようやく正式な修行僧として認めらるのです。

“新到”とは、新米修行僧のこと。“掛塔”とは、正式な修行僧として道場にどまること。いわばそれまでは仮免許であったものが、正式な免許証となるようなものです。しかし正式な修行僧としての免許証が発行されたとしても、“初心者マーク”が外れるわけではありません。それから修行道場で何を学び、何を考え、何を身に着けていくのか……。日々の修行の中で問われていく、その第一歩を踏み出したにすぎないのです。

近年、「これは自分の思っていた仕事とは違う」と言って、わずか数か月で職場を

『禅のこころ -曹洞宗-』

離れる若者も多いと聞きます。少し慣れてきたその先に何が待っているのかを見ずして、そこを立ち去るのは少し勿^{もったい}体ない気もします。つらかった新米時代は、もしかしたら人生の中で最も純粹で、何物にも代えがたい、最も誇れる日々となるかもしれませぬ。

「新到掛搭式」を迎える頃には、新米和尚であっても、入門したての頃とは見違える程修行僧としての自覚と風格が自然とその身に備わり始めているのも事実なのです。

— 終 —